

2-5					
主題	移乗ボードを導入しご利用者と職員の身体的、精神的負担軽減に繋がった研究				
副題	腰痛予防を行ない定年まで現役介護職員として働きたい				
キーワード 1	移乗ボード	キーワード 2	腰痛予防	研究(実践)期間	11ヶ月

法人名・事業所名	社福) 章佑会 やすらぎミラージュ
発表者(職種)	清水秋人(介護職員)、安西咲希(介護職員)
共同研究(実践)者	山田暁佳(フロアリーダー)、高山美季(機能訓練指導員)

電話	03-5905-1191	FAX	03-5947-3238
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成11年に開設した84床(短期入所を含む)の従来型多床室の施設です。自治会と相互の行事参加や小中学生の職場体験など近隣との交流が多く、ご利用者に楽しみながら生活を送って頂ける様、季節に合わせた行事を行ない、8月の納涼祭には地域から90人以上のボランティア参加があります。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成29年8月の時点で移乗動作に全介助が必要なご利用者が11名いた。ベッドとリクライニング型車椅子間の移乗方法は、職員2人で両脇下と両下肢を支えながら持ち上げて行なっていた。中には体格の良い男性ご利用者も含まれおり職員の身体的、精神的負担も大きかった。そのことがきっかけとなり介護職員が機能訓練指導員に相談。平成28年に移乗ボード(以下、ボードとする)の使用を提案したが、一手間をかける事に抵抗があり定着しなかった。しかし、今回は介護職員側から声があがったため、再度移乗介助方法について見直しを行なう事にした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

移乗場面にボードを導入することにより職員の身体的、精神的負担の軽減につなげたい。職員が腰痛予防に対して考えるきっかけとなり、日頃の業務も自ら考えながら行なう事ができるようにつなげたい。また移乗の介助方法を見直すことで、ご利用者の外傷予防にも効果があるのではないかと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成29年9月に腰痛予防委員会を立ち上げ「腰痛の有無」「福祉機器(以下、機器とする)の導入受け入れ」等の内容を介護職員対象に意見調査を実施。職員に機器導入がなぜ必要かを説明し、どの場面でどの機器が対象になるかを検討した。国際福祉機器展等で最新の動向を調査し、販売会社に介護場面で使用する為の研修、デモ機の貸出等を依頼。試用を重ね機器の選定を実施し介助型車椅子に使用可能な短いボードとリクライニング型車椅子に使用可能なジャバラ式のボードの2種類を購入した。居室と機械浴の場面で使用を開始。委員会メンバーが中心となり使用方法手順を書面にし、職員同士1対1でレクチャーを

行い、全職員が使用出来る様にした。ボードの使用をケース会議で話し合い、ご利用者のケアプランに反映させた。また、機器導入の継続した取り組みを平成30年度事業計画に提案し正式に採用された。ボードを導入して9か月後に意見調査を再度実施。施設内で記入している事故報告書から①移乗時の外傷②移乗介助時が原因と考えられる外傷③その他の外傷に分けボード使用前8か月間の統計比較を行った。

《4. 取り組みの結果》

ボードの使用をケアプランに反映させた事で共通意識が持て、移乗介助時にボードの使用が定着した。意見調査の結果、二人介助の際、職員間でのタイミングが合わないなど機器の使用に不慣れな理由から、機器の導入に消極的な職員が6%から17%に増えた現状があった。しかし、体力的不安に関しては69%から45%に減少し「腰痛の痛み止め薬やサポーターを使用しなくなり慢性的な痛みが軽減した」「浴室内で使用出来る為、体の大きな利用者に対しても安全な介助が行えた」というプラスな意見も出た。ボードを積極的に使用していたのは、従来の介護方法に不安を感じていた職員が多く、意見調査の結果、介護職として働き続けられると考える年齢が約10年伸びた。移乗時にご利用者から痛みの訴えが聞かれなくなり、事故報告書（上記①②）の件数は24件から10件に減少する結果となった。

《5. 考察、まとめ》

ボードを介助場面に取り入れる為、1対1で使用方法をレクチャーしたことで全職員に周知することができ、高い利用率に繋がった。意見調査では、ボードの使用をご利用者の為（事故防止）、職員自身の為（腰痛予防）のどちらか1つだけの目的のみで使用している職員に分かれている面があった。しかし、結果的に職員は腰痛や体の負担、ご利用者は痣や皮ムケ、痛みの訴えが減少し、職員、ご利用者共にプラス面が大きいことから、これからの介護現場において、機器の導入が必要となってきているとの結論に至った。

ボード導入後の意見調査では、積極的、消極的の両方の意見があったが、ボードの使用を継続していけば、ケア全体に対しての考え方が向上していくのではないかと考える。また、ボードの基本的な使用方法は職員同士のレクチャーやデモによって習得することができた。しかし対応できない場面もあり、ボードは使用しているが、従来の介護方法でも良いと感じている職員がいる現状もあった。そのため、今後も職員1人1人が機器の必要性を理解し、使用出来るよう研修などを重ねていくことが大切と考えた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「滑らせるトランスファーセミナー研修資料」(2017年8月3日開催)、ラックヘルスケア株式会社
「アクティブ福祉 in 東京'17大会資料」(2017)、東京都社会福祉協議会

《8. 提案と発信》

本研究では一定の効果を得る事ができたが、職員1人1人に目を向けてみると新しい取り組みに対して消極的な職員もいることが分かった。今後も職員の意識統一を図り、将来の介護を見据えて介護ロボット等の利用を含め、ご利用者と職員の快適な介護と生活空間を作るための活動を行なっていきたい。